

## 卷頭 一言

人法相關の道理、依正不二の眞理に立脚して、自身の不思議なる法華經の行者なること、身延の山の鷲峰に等しき靈地なることをば、宗祖大師は御遺文に

此處は人倫を離れたる山中也、東西南北を去て里もなし、かゝるいと心細き齒谷なれども教主釋尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相傳し日蓮が肉團の胸中に秘して隠し持てり、されば日蓮が胸の間は諸佛入定の處也、舌の上は轉法輪の所、喉は誕生の處、口中は正覺の砌なるべし、かゝる不思議なる法華經の行者の往處なれば、いかでか靈山淨土に劣るべき、法妙なるが故に人貴し、人貴きが故に處尊しと申は是也至彼月氏の靈鷲山は本朝此身延の嶺也。

と示された、衣食給せず常に飢寒に苦めらるゝ所謂貧道の身の上に四處道場を直感し、山阿溪頭寂寞無人の僻地に於て事の寂光土を實現せしめたる大師の信仰世活が如何に崇高偉大であるかは一讀直に看取せられるではないか。又

後ろには峨々たる深山聳へて梢に一乗の菓を結び、下枝に鳴く蟬の音滋く、前には湯々たる流水湛へて實相眞如の月浮び、無明深重の闇晴れて法性の空に雲もなし至傳へ聞く釋尊の住み給ひけん鷲峰を我朝此砌に移し置きぬ。

とも云はれ、此地の山川草木皆妙法の姿であり、事々物々實相眞如、其儘であることを述べて茲即ち靈山淨土なることを示された、其高潮せる法悅歡喜の聖情は正に葦端に躍動して居るではないか。

國民全体が大師に軌範を求めて此偉大なる信仰に入り、法悅と感謝の聖的生活を營み得るならば立正安國の素願は茲に満足するのである。それが人類全體に行き渡つたならば、則ち閻浮統一、絶待平和の理想は正に實現するのである、爾らば此葢爾たる身延の山は國家鎮護の根本靈場、世界平和の發祥地ではないか、末法萬年の暗黒を照破する大光明の出發點ではないか、凡そ我國佛教中諸他の宗々に亘りて名山大刹は澤山あ

るが彼等は皆靈山靈刹と稱することは出来ぬ、开は「法龕なるが故に人尊からず、人尊からざる故に處亦た貴からず」の道理で實質上已むを得ぬ事である、我大師自ら「此山を本として參るべし」と勸奨なされたのは強ち信徒吸集の爲ではない、教權樹立の爲ではない、要は「我が聖的生活に倣へよ」との垂訓である、他語以て之を言はゞ破邪顯正の毒鼓天鼓である、國民覺醒の曉鐘であり、人類救濟の福音である、必ず井蛙の見、宵々の情を以て之を忖度してはならぬ、宜しく眼孔を擴めて眞理の命する處、道理の示す所を大觀すべきである。

本年は此世界的靈地の開創、即ち宗祖大師が文永十一年五月入山せられてより正に六百五十年に相當する依つて本山としては相當期間に於て紀念の法會が舉行されることであるが、朝夕此棲神の靈地に奉仕し夙夜行學二道に勵みつゝある吾人は、茲に雜誌「棲神」を發行して深く之を紀念し、一は以て大師の恩徳に感謝し一は以て自身行學の増進に資し、更に以て天鼓の一撃、曉鐘の一杵に擬するものである。(大正十二年一月十一日)